

令和 2 年 6 月 30 日現在

機関番号：32711

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02424

研究課題名(和文) 黙阿弥作品の発展的研究 基礎資料更新と作劇論の再構築

研究課題名(英文) Evolving research on Mokuami work: updating basic materials and reconstructing the theory of drama

研究代表者

吉田 弥生 (Yoshida, Yayoi)

フェリス女学院大学・文学部・教授

研究者番号：00389876

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：黙阿弥の小説の脚色作品には、歌舞伎作者になる以前の貸本屋時代(天保3年(1832)より3年間)に新刊本として刊行された本を調査した結果、黙阿弥が幾度も脚色を試みた馬琴作品も含まれることが明らかとなった。また、講談脚色作品を見直し、黙阿弥と講談を結び付けた人物が細木香以であること、七代目市川團十郎の『勸進帳』制作現場と講談および(のちに合巻の脚色で関係を深める)柳下亭種員とが結びつくことも明らかにできた。さらに、黙阿弥の特色である音楽性に関し、『連獅子』をめぐって考察を行い、上演においてより勇壮・華麗を目指したことがわかった。黙阿弥作品の平成期における上演状況も論考を成せた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

黙阿弥作品の成立を考察する上でいかに素材論と、劇界および周縁の人間関係に視点をおくことが重要であるかを述べることであったことには学術的な意義があったであろう。この研究に基づき、平成30年度に資料展示監修(「黙阿弥の明治」展(平成30年10月1日～平成31年1月27日、伝統芸能情報館情報展示室)を行い、黙阿弥活躍期の後半について解説した機会や、黙阿弥作品の音楽性の面を、実演を交えた公開研究会(平成30年11月26日、伝統芸能情報館レクチャー室)の開催については、新聞等の複数メディアで紹介され、広く社会に研究内容を共有する機会となり、社会的意義をもつこととなった。

研究成果の概要(英文)：As for the adaptation of Mokuami's novel, as a result of investigating the book published as a new book in the rented bookstore era (3 years from Tenpo 3 years (1832)) before becoming a Kabuki writer, Mokuami tried many times. It was revealed that the work also included the Bakin work. In addition, we reviewed the story adaptation work, and the person who linked the story with Mokuami was Kouji Saiki, and talked with the seventh generation Ichikawa Danjuro's "Kanjincho" production site (later deepening the relationship with the adaptation). It was also made clear that Ryuka-tei Tanekazu member was connected. Furthermore, regarding the musicality, which is the characteristic of Mokuami, we considered about "Renjishi" and found that we aimed to be more brave and splendid in the performance. I was able to discuss the performance situation of the Mokuami work in the Heisei period.

研究分野：日本文学・演劇学(日本演劇)

キーワード：日本文学 日本演劇 近世文学 歌舞伎 黙阿弥

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 歌舞伎作者・黙阿弥（二世河竹新七）に関する評伝は既に語り尽くされた観があるが、作劇の背景、周縁文芸・風俗との関わりにおける作品研究はいまだ未開の部分を残している。例えば黙阿弥作品が小説や話芸を原作に持ち、それらの脚色が多いことは既に指摘したものの、素材から上演に展開させる作劇術に関して未解決の作品が相当数ある。本研究を開始することによって、それら作品研究を進捗させ、研究史を整備し直し、上演を描く錦絵の調査・目録化、没後も含めた上方における上演をも注視してその評価を見直す必要があると考えられた。

(2) 研究の基盤となる情報を提供した『黙阿弥研究の現在』（2006年、雄山閣）を執筆・刊行した時点では、それによって後進の研究者によって多くの解明が得られるものと期待したが、未翻刻作品の翻刻・活字化とその解題が刊行される等の基礎資料整理や明治演劇改良時代における諸問題のほかはほぼ進展が見られなかった。情報を提供したことによって却って着手し難い環境を作ってしまった可能性もある。そうした責任を負い、情報提供した研究者本人が改めて具体的な黙阿弥作品研究を進捗させ、同時に新しい研究史を築いていくことが使命であろうと認識した。

## 2. 研究の目的

(1) 研究史を整備し直して目録データを更新し、上演を描く全錦絵データを調査・目録化して絵画的手法を再考し、没後も含めた上方における上演をも注視してその評価を見直し、黙阿弥論の再構築を目的とする。また、黙阿弥以後の歌舞伎がなぜ古典化したか、黙阿弥作品が以後の演劇・芸能に何を残したかという課題にも迫り、将来的に昭和期で上演の途絶えた作品を中心に、今日再び上演可能である価値を示したいため。

(2) 黙阿弥作品における曲亭馬琴の影響について、これまでに詳細を研究してこなかった7作品の調査を試みる。視点としては、馬琴文学を特徴づける「対偶の方法」や「構成美」とともに、鶴屋南北に学んだ対偶的方法がどのように採り入れられたか、明治改元の年に『里見八犬伝』を脚色したのはなぜか、明治初期に新風俗を意識した創作をも馬琴作品に拠った意味はなにか、江戸から明治へという大きな変革期を歌舞伎作者としてどのようにとらえ、作劇を行ったか、等である。それらの点から「なぜ馬琴だったのか」を再考したい。

(3) 文芸と話芸という同時代文化を黙阿弥が劇化する意義について、時代を映す一つのメディアとして捉えた試論を展開したい。役者に、座元に、観客に親切を心掛けて作劇をした黙阿弥という作者を考えたとき、作者としての意図や意思の不在を認めざるを得ない感覚がある。小説や講談を脚色する際にも、常に外的な理由が見出される。当時も、今日までも、あるいは黙阿弥本人も意識しなかった可能性があるが、役者を活かし、観客を喜ばせる目的を持ちながら、流行の立体化、時代の視覚化を目的とした一種の媒体だったのが黙阿弥劇ではなかったかという仮説に基づいて考察を行うことを目的とする。

## 3. 研究の方法

(1) 黙阿弥作品のうち、曲亭馬琴の読本を脚色したものは、維新前夜といえる慶応期に集中的に行われたといえる。その要因の一つとして、江戸末期に黙阿弥と提携的に組み、「白浪作者・白浪役者」と称された4代目市川小團次（慶応2年(1866)5月没）の死期を早めたといわれる幕府による上演規制が考えられる。他の理由はなんであるか、曲亭馬琴の読本に拠って書かれた全作品を原作の読本と比較検討する。

(2) 講談の脚色作品は講談速記本と比較検討する。対象となる作品は80作品ほどあり、研究期間内にはすべての作品を調査することは不可能と予測するが、将来的な継続を見込みつつ、詳細を調査していく。さらに調査内容から、近世後期におけるメディア・ミックスの様相を考察する。

(3) 江戸・東京以外の地域における黙阿弥作品上演・評価を調査、テキストとしての価値を検討する。江戸・東京における再演では、演技の伝承が反映されたはずであるが、テキストのみ受容した場合の黙阿弥劇がどのような評価を得たかに注目し、たとえば明治27年『魁駒松梅桜曙微』の写本（阪急池田文庫所蔵）調査など、上方における上演を描いた錦絵・番付・上演台本を手がかりとして考察する。

(4) 近年の歌舞伎上演レパートリーの減少をかんがみ、昭和後期・平成期の黙阿弥作品上演を調査する。上演数が減少した作品、ある時期より上演がみられなくなった作品を見出し、意識的に該当作品の再考を行う。「復活」ではなく「再演」が可能な作品を提示していく。古典の研究を現代へむけて発信することで、現在の古典を活性化させ、未来の古典の存在価値をそのように保持できるものか、その可能性に挑む所存で遂行する。

## 4. 研究成果

(1) 黙阿弥の小説脚色に関する主な研究成果として、立作者となった初期より手がけた小説の脚色作品に関する論考を「再考・黙阿弥と小説」（平成31年3月、フェリス女学院大学国文学会『玉藻』53号）へまとめることができた。最初に黙阿弥が小説の脚色を試みたのは嘉永5年（1852）七月、河原崎座初演『児雷也豪傑譚話』である。安政3年の見立

番付『東都流行合巻競』（東京都立図書館特別文庫室所蔵を管見）で東の「大関」の位置にあり、当時の人気度を伝える。『児雷也豪傑譚話』を脚色した頃の黙阿弥は、斯波晋助から2世河竹新七へ改名後の約十年、新作をきらう慎重な性分の座元・河原崎権之助のもとで不遇時代を過ごしていたが、この流行小説の劇化が成功したことで新作を許される好機が訪れた。つまり、『児雷也豪傑譚話』とは黙阿弥の作者人生の初期において意義深い作品でもあり、小説を脚色するという黙阿弥の創作方法を特色づける契機になった作品と位置づけられるのである。初演において主人公の児雷也を演じたのは8代目市川團十郎。美貌の8代目が妖術をあやつるスペクタクルな場面は大いに人気を呼び、安政2年（1855）5月には後日狂言として『児雷也後編譚話』が上演された。また、『しらぬひ譚』（嘉永6年（1853）2月、河原崎座で初演）を合巻『白縫譚』に拠って書いた。なお、その手法は合巻の文のみならず、挿絵をも利用して演出に活かされたことが明らかである。それより、さらに考察をすすめ、黙阿弥が作者になる以前の貸本屋時代（天保3年より3年間）に新刊本として刊行された本を調査すると、黙阿弥が幾度も脚色を試みた馬琴作品も含まれることが確実となり、『魁駒松梅桜曙徹』（『皿皿郷談』の脚色）、『菖蒲太刀対侠客』（『開巻驚奇侠客伝』の脚色）、『質庫魂入替』（『昔語質屋庫』の脚色）、『新累女千種花嫁』（『新累解脱物語』の脚色）、『里見八犬伝』（『南総里見八犬伝』の脚色）、『舞台明治世夜劇』（『南総里見八犬伝』の脚色）、『石魂録春高麗菊』（『松浦佐用姫石魂録』の脚色）について、これまで詳細を調査できていなかった部分を調査したことで、従来の自身の研究の行ってきた研究内容を更新する結果を導くことができた。さらに作品の「小説化」の方向についても研究成果を出すことができ、『新累女千種花嫁』（令和2年1月、日本芸術文化振興会国立劇場調査養成部）を「正本写合巻集」の第二期25巻として刊行した。内容は慶應3年（1867）7月に江戸の版元・蔦屋吉蔵より版行された合巻『新累女千種花嫁』の影印（東京大学総合図書館所蔵）と翻刻（東大本のほか、早稲田大学演劇博物館所蔵本を底本）のほか、上演を描いた錦絵・番付の同時代資料を掲載し、解題を付したものとなった。当該合巻（正本写）は黙阿弥作品の初演を合巻のかたちで再録したものであり、初演時における構造を明確に伝える資料を情報公開できたといえる。

(2) 黙阿弥の講談脚色に関する成果として、「黙阿弥と講談」（令和元年9月、演劇出版社『演劇界』）に論考を掲載した。平成29年度の研究計画にしていた黙阿弥と、その素材として利用した講談との関係を見直し、黙阿弥と講談を結び付けた人物・細木香似について、七代目市川團十郎の『勸進帳』制作現場と講談およびのちに合巻の脚色で関係を深める柳下亭種員とがすべて結びつくこと、提携関係を築いた四代目小團次と講釈師・二代目松林亭伯円と白浪物とのつながり等に言及できた。黙阿弥が盛んに作劇をおこなっていた当時、いかに講釈と密接な関係にあったかの例として、安政2年（1855）10月2日午後10時頃に起きた安政大地震（震源は本所深川辺り。ここよりほど近い浅草見附は江戸講談発祥にゆかりの場所、太平記講釈場があったという）の時に寄席にいたと評伝が伝えることがあげられる。揺れを覚えて飛び出した寄席は講釈専門の釈場だった可能性は高い。そして、黙阿弥作品には、「講談物」と呼べるほど講談から脚色した作品群がある。その活躍した江戸後期から明治前期、講談は民衆にとって歌舞伎と並んだ最高の娯楽だったから、黙阿弥がそうした流行に合わせたともいえるが、実はそれ以上に黙阿弥と講談の接点は多い。黙阿弥の作劇と講談を関係づける契機を作った人物は細木香似である。「今紀文」と呼ばれた津藤こと細木香似は、その財力で幕末歌舞伎と花街を後援した。黙阿弥と津藤は三題連中の同席などで親交を持ったらしい。この津藤の家というのが、7代目團十郎（当時は5代目海老蔵）が能役者らと能『安宅』から『勸進帳』を作劇する思案を進めた場所であった。團十郎は『安宅』に加える新味を講談に求め、講釈師・伊藤燕陵の種本を借用して「山伏問答」を創った。勝彦蔵を名乗っていた25歳の黙阿弥は、この制作過程に立ち会っていたのである。2世河竹新七と改名して立作者となった黙阿弥は『児雷也豪傑譚話』（嘉永5年）など合巻の脚色作品を次々と成功させた。原作合巻の作者である柳下亭種員とは交友関係があり、種員の門下で正本写合巻を得意とした柳水亭種清は、もと黙阿弥の弟子で勝晋輔を名乗っていた。その種員は、戯作者・初代柳亭種彦に弟子入りする以前は講釈師・乾坤坊良斎を師とし、寄席に出ていた。黙阿弥が『夢結蝶鳥追』（安政3年）『網模様燈籠菊桐』（安政4年）『吉祥参由縁音信』（明治2年）など、幾度も良斎の講談に拠った作品を書いたのは、種員の師という密接な縁も関わるだろうか。その良斎が創作（のちに高座で評判をとったのは初代志生と一立斎文車）した講談「お富与三郎」に取材した作品に『与話情浮名横櫛』（通称「切られ与三」）がある。作者は黙阿弥と同じく鶴屋孫太郎に入門したライバルの三世瀬川如臯だが、講談から脚色された如臯のヒット作「切られ与三」に触発されて『處女翫浮名横櫛』（元治元年）などの書替作を書いた。つまり間接的にも良斎の講談を脚色したといえる。中村座の立作者だった如臯と提携的に活躍していた役者が四代目市川小團次であった。その小團次が中村座から黙阿弥のいた河原崎座へ転じたことが、黙阿弥と小團次を結びつける契機になった。黙阿弥は上方出身で写実味のある小團次の芸風に似合う新作を考案した。その最初の作である『蔦紅葉宇都谷峠』（安政3年）も好評を得たが、その翌年、小團次の食客という関係の講釈師・二代松林伯円が作った白浪物の講談『天保怪鼠伝』を脚色し、小團次が義賊の稲葉小僧（講談では鼠小僧次郎吉）を演じた『鼠小紋東君新形』（安政4年）が空前の大当たりとなったのである。黙阿弥が作者生涯に書いた作品総数はおよそ360作だが、このうち世話狂言が130作、さらにその半数以上が盗賊を主人公とする作品である。白浪物の講談を得意とした二代伯円が「泥棒伯円」と呼ばれたのにあやかって、黙阿弥は「白浪作者」、小團次は「白浪役者」と異名をとり、黙阿弥と小團次と白浪物の世話講談の蜜月が幕末の江戸歌舞伎の一時代を彩ることとなったのである。明治期では時代物、御家物作品の素材を講談に求めた傾向もみとれた。同じ講談の素材を幾度も手がけるのが、黙阿弥の講談脚色の傾向といえる。一例として、慶安四年八月に起きた由井正雪を首謀者とする江戸幕府転覆計画事件に基づいた「慶安太平記」から、江戸城攻撃役・丸橋忠弥の件を主に脚色した『楠紀流花見幕張』（明治3年）、その改作『花見時由井幕張』（明治8年）、増補を加えた『花菖蒲慶安実記』（明治16年）が書かれた。「慶安太平記」は小團次の養子で黙阿弥が引き上げた初代市川左團次が丸橋忠弥を演じ、召し捕りの場における大立ち回りが大評判となった作品である。そして、黙阿弥が明治に入ってなお江戸を描いた作品群のなかでも代表的な『梅雨小袖昔八丈』（明治6年）は3代目麗々亭柳橋（のち初代春錦亭柳桜）が得意とした人情噺「白子屋政談」に拠って書かれたが、「白子屋政談」はもと良斎作の講談。初演時に髪結新三を演じた5代目尾上菊五郎の意向で、大岡越前守に早変わりをした「町奉行所」が加えられたというから、「大岡政談」の脚色グループに入る。黙阿弥作品にいかに講談脚色が多いかということ、表向きに講談脚色とうたわずとも講談の影響が大きく、素材として頼っていた様相をあらためて明らかにできた。

(3) 歌舞伎作者・黙阿弥の劇界における位置や活躍期の時代背景を俯瞰する研究として、申請時に平成30年度の計画として掲げた「(A) 黙阿弥が「独り勝ち」のごとく江戸の劇壇にあった理由 (B) 流行や人々の嗜好を映しとらえ、さ

らにその時代の流行を創り出す 最も魅力的なメディアという立場だったこと」の2点を検証した。具体的には、明治期における黙阿弥の活躍を再検討し、演劇改良運動の名のもと急 進的に歌舞伎の近代化をはかろうとする政府関係者や一部の俳優と劇場主らの志向に応じて手がけた作品が、同時に歌舞伎へ新たなジャンル(活歴物・散切物・松羽目物舞踊)を生み出したことを明らかにした。活歴物と散切物は、明治に入って歌舞伎に現れた新しいジャンルである。9代目市川團十郎は、江戸期の時代物が幕府の法令のため物語の時代設定を変え、様式的な演技や大がかりな舞台転換で見てきたことを改めようと、「桃山譚」(明治2年(1869)8月、市村座)の加藤清正や『新舞台巖楠』(明治7年(1874)7月、河原崎座)の楠正成などを演じた明治初期より、時代設定や登場人物の扮装を正しい考証に基づいた衣裳・道具を用いて史実に忠実なかたちで上演する工夫に努めていた。明治11年(1878)10月、黙阿弥が新富座へ書いた『二張弓千種重藤』で9代目團十郎が実盛役を演じた際、戯作者・仮名書魯文が「仮名読新聞」紙上でその演出を「活歴(活きた歴史)」と評したことから、そうした新演出による史劇は「活歴物」と呼ばれるようになった。明治16年(1883)頃には歴史考証家たちを中心に「求古会」が結成され、團十郎の活歴物へアドヴァイスが提供されたものの、一般観客には面白みのない活歴は不評だったという。黙阿弥が9代目團十郎のために書いた活歴物の代表作に『太平記』を題材とした『北條九代名家功』(「高時」明治17年(1884)11月、猿若座初演)がある。一方、散切物は、急激に変化する時代の中で登場した新しい時代風俗の中で生きる人々を描こうとした作品群である。「散切」とは、明治4年(1871)8月に布令された散髪脱刀令(いわゆる断髪令)によって、男性たちが月代を剃り、切った髪を後ろになでつけた髪型のこと、つまり散切物は歴史上の人々ではなく、作品が書かれたときに生きる人々の暮らしや思想を題材とした世話物の一種である。東京ではその翌年、黙阿弥によって書かれた『東京日新聞』が上演、新聞を題材として当時のさまざまな事物を織りこんだことが斬新な趣向だった。そのほか黙阿弥の書いた散切物には、イギリスの作家・ブルワー・リットンの小説『Money』を翻案した『人間万事金世中』(明治12年(1879))、毒婦物の『綴合於伝仮名書』(明治12年(1879))、雑誌「歌舞伎新報」に初連載した『霜夜鐘十字辻笠』(明治13年(1880))、引退を披露した際の「島衛月白浪」(明治14年(1881))、『水天宮利生深川』(明治18年(1885))など明治期の黙阿弥にとって意義深い作品が多くあったと思われる。「黙阿弥の明治」展(平成30年10月1日~平成31年1月27日、伝統芸能情報館情報展示室)の監修および解説では、上記の該当作品を取り上げ、従来の言説にとどまらず資料展示によって成果を公表することができた。

(4) 黙阿弥作品にいわれる 音楽性 の傾向をめぐる考察を、黙阿弥の舞踊作詞から行った。黙阿弥の舞踊作品の主なものは松羽目物作品である。松羽目物は、題材を主に能・狂言から取り、衣裳・小道具なども能・狂言に準じたものを使って行う歌舞伎舞踊の「能取物」(「本行物」)の一種である。松羽目物を上演する舞台の特徴は、大道具も能舞台を模して、上手に臆病口、下手に五色の揚幕をかけ、正面には能舞台の鏡板と同じように大きな老松が描かれる。江戸期より、松羽目の舞台は「式三番叟」の上演時など儀式的な上演で使われ、また「石橋物」など能に取材し、歌舞伎ならではの趣向を入れ、アレンジされた舞踊作品が創られてきたが、明治期以降の能取物・松羽目物の舞踊劇は、当時の政府高官や知識人たち、上層階級の人々が、歌舞伎が高尚な娯楽であってほしいと考えていたことに合わせて、能・狂言の様式や作品の内容をなるべく原型に近い形で取り入れようとしたのであろう。明治期以降の松羽目物の創造手法は、並木五瓶の作で5代目市川海老蔵(7代目市川團十郎)が天保11年(1840)3月に初演した『勸進帳』に遡る。この作品で松羽目の背景が用いられたと伝わる。若き日の黙阿弥はこの初演時に5代目海老蔵のブロンズ像を舞台でつとめたという。「勸進帳」は9代目市川團十郎によって演出が洗練され、長唄の名曲や今日まで上演回数が多い人気作であることも知られるところである。明治期に黙阿弥の書いた松羽目物作品には、『土蜘蛛』(明治14年(1881))、『釣狐』(明治15年(1882年))、『茨木』(明治16年(1883))、『船弁慶』(明治18年(1885))、また舞踊劇に『紅葉狩』(明治20年(1887))がある。なかでも明治34年(1901)、村山座初演、竹柴晋吉加筆、3世杵屋正治郎作曲「連獅子」は、実は文久元年(1861)に初世花柳寿輔の子芳次郎の名披露目に振付、2世杵屋勝三郎が作曲(「勝三郎連獅子」)した作品で、黙阿弥の作詞が元となっている。黙阿弥の舞踊作品、とした際には、舞踊は振付師が創作するものであるから、歌舞伎作者はどの部分を創作するかといえば、演奏曲の作詞となる。黙阿弥作品は「豊かな音楽性」があるという評価が一般的だが、実際はいかがであるかという観点から、舞踊作品の作詞に着目した公開研究会を催した(平成30年11月26日、伝統芸能情報館レクチャー室)。若き日の黙阿弥が7代目市川團十郎の『勸進帳』創演に関わり、そこで振付の初代花柳寿輔、役者の4代目市川小團次と知己を得たことを契機に、幕末の劇界で 独り勝ちと目される作者へ大成したことが考えられた。なお現行上演では3代目杵屋正次郎作曲のものが用いられるが、黙阿弥が書いた際には2代目杵屋勝三郎が作曲したため2つの曲が存在する。実演で比較した結果、黙阿弥の原作では獅子をより勇壮に描いたことが確認できた。そして、黙阿弥は『連獅子』をはじめ初代花柳寿輔のために(親友として)作詞したことにも、独特な傾向を見せたといえる。黙阿弥は戯作者・柳下亭種員や講釈師の2代松林伯圓、そして役者の4代目小團次など、芝居を通して親密となり、周囲の人々との繋がりから創作に結びつくことが多く、その例にもれない。黙阿弥が『勸進帳』初演にむけて寿輔と共に苦心した経験から、また明治期に松羽目物舞踊を手がけていく過程の中で、[狂言師が親子の獅子の精に扮し 合狂言を挿み 石橋]という形式を能狂言に借りるという手法を考案したかと推されるのである。また、『連獅子』は松羽目物の中でも素材を取るのではないのが異色であるが、その誕生から歌舞伎に移入された経緯に理由があったといえるだろう。かくして黙阿弥が詞を書いた勝三郎の江戸の音が、明治に入り、改作されて歌舞伎舞踊の彩となったことも考察できた。

(5) 現行上演における黙阿弥作品の考察も成果をまとめることができた。歌舞伎は古典でありながら今日を生きる存在、そして未来への遺産としての可能性も検討を要する。黙阿弥作品は昭和・平成期においては多くの上演回数を誇ったが、歌舞伎の多様な上演作品が模索される現在こそ原作の魅力を伝え遺し、上演方法に関する情報整理が急がれ、そうした観点からである。「平成の歌舞伎史 喪失・再生・模索の三十年」(令和元年7月、歌舞伎学会『歌舞伎 研究と批評』)では、平成初期における三代目市川猿之助(現・猿翁)が創造する澤瀉屋型の芸が黙阿弥と提携した役者の四代目市川小團次の系をひくことを挙げ、近代以降に失われたケレン等の芸の具現化と、その先にスーパー歌舞伎の誕生もあったことに言及した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 吉田弥生	4. 巻 53
2. 論文標題 再考・小説と黙阿弥	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 玉藻	6. 最初と最後の頁 1 - 14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉田弥生	4. 巻 52
2. 論文標題 奥から表へ 女歌舞伎の種・芽・蕾	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 玉藻	6. 最初と最後の頁 24-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉田弥生	4. 巻 第1号
2. 論文標題 『質屋魂入替』に見る 開化 前夜	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 フェリス女学院大学国文学会日本文学研究会論文集 黎明	6. 最初と最後の頁 6 - 13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉田弥生	4. 巻 63
2. 論文標題 平成の歌舞伎史 喪失・再生・模索の三十年	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 歌舞伎 研究と批評	6. 最初と最後の頁 69 - 76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉田弥生	4. 巻 9月号
2. 論文標題 黙阿弥と講談	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 演劇界	6. 最初と最後の頁 40 - 41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 吉田弥生	4. 発行年 2020年
2. 出版社 日本芸術文化振興会	5. 総ページ数 273
3. 書名 正本写合巻集25 新累女千種花嫁	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>1. 国立劇場 伝統芸能情報館における『黙阿弥の明治』展（会期：平成30年10月1日～平成31年1月27日）監修 2. 公開研究会「江戸の音・明治の彩り 黙阿弥と「勝三郎連獅子」」（開催日：平成30年11月26日、開催場所：国立劇場伝統芸能情報館レクチャー室）</p>
---

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考